

児童養護施設におけるライフストーリーワークの多様な形態

－「生い立ちへのかかわり」に関する全国児童養護施設調査より－

○ 神戸女子大学 曾田 里美 (2279)

キーワード：児童養護施設・ライフストーリーワーク・生い立ちへのかかわり

1. 研究目的

児童養護施設では子どもの生い立ちを取り扱うライフストーリーワーク (LSW) が重要な支援として位置づけられている。LSW には、主に生活場面型 LSW とセッション型 LSW という 2 つの形態があり、それらが段階的に行われている。生活場面型は子どもの様子や出来事を記録や写真に残しておくことや、日常場面で生活上の出来事や生い立ちに働きかけて子どもと共有することである。セッション型は生活場面とは区別した場面で 10 回程度のセッションを通して計画的に少しずつ子どもが自身の生い立ちを整理していくのを支援する。この 2 つの形態に加え、曾田 (2018) は、LSW 実施施設への聞き取り調査の分析から設定型を見いだした。設定型は、生活場面とは異なる 1 回から数回の面談や訪問の中で子どもの生い立ちを扱っていく形態で、生活場面型とセッション型の間位置する。このように LSW は多様な場面・形態で実施されているが、日本の LSW の導入がセッション型を主とするイギリスから学んだという経緯から「LSW＝セッション型」というイメージが強い傾向がある。生活場面型や設定型を含めて LSW とする捉え方が浸透していないことが予測される。そこで、本研究では、LSW に拘わらず広く「子どもの生い立ちへのかかわり」を調査し、質的調査で導出した多様な形態の LSW を量的調査で検証すること、LSW の捉え方を探ることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

児童養護施設 597 か所を対象に「子どもの生い立ちへのかかわり」に関する調査票を郵送した。回答は、生い立ちへのかかわりを中心に行なっている、もしくは施設におけるそのような実践を把握している職員に依頼した。調査票の構成は、①回答者・施設のプロフィール、②「子どもの生い立ちへのかかわり」実施状況、③「子どもの生い立ちへのかかわり」に関する意見である。②については各質問項目に対して、施設における実施度 (5 件法)、実施場面・形態、支援主体 (中心に行う職種) の 3 点を尋ねた。調査期間は、2021 年 2 月 20 日～3 月 18 日である。

3. 倫理的配慮

本研究は、神戸女子大学人間を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した (承認番号 2019-27-1)。調査票に、調査への回答は任意であること、個人情報保護やプライバシーの尊重への留意、調査票やデータの管理、結果の公表等について説明し、調査への回答をもって調査協力への同意とすることを明記した。

4. 研究結果

597 施設のうち 209 施設から回答を得た（回収率 35%）。

子どもの生い立ちへのかかわりの実施場面・形態については、41 項目のうち生活場面型が 20 項目あり、実施度の平均値は 4.07、支援主体は生活担当職員が 70%以上を占めていた。項目の中身は、生活の中で子どもと出来事や日々の成長を共有する・生い立ちや過去の出来事に関する子どもの話を傾聴する・子どもの疑問を受け止めるという内容であった。次いで設定型が 11 項目あり、実施度の平均値は 3.55、支援主体は生活担当職員と児童相談所、家庭支援専門相談員が含まれた。項目の内容は、生い立ちや家族の状況、施設生活の見通しを説明する・子どもの疑問に回答する・家族やきょうだいと再会する機会をつくるというものであった。残りの 10 項目は多様な場面・形態が選択されており、そのうちセッション型の割合が比較的高かった（20～30%）4 項目をセッション型と同定した。そのセッション型の実施度の平均値は 2.46、主な支援主体は生活担当職員、児童相談所、施設の心理職であった。項目の内容は、ライフストーリーブックなどを作成しながら生い立ちを整理する・子どものゆかりの場所を一緒に訪問する・エコマップを作成しながら大切な人や支えになっている人を確認するなど、一般的にセッション型 LSW の中で実施されるコンテンツが含まれていた。

LSW の理解については、LSW についてよく分からない（7.7%）、セッション型 LSW を通して子どもと生い立ちを整理することを意味する（25.4%）、日常における子どもの生い立ちや出来事を扱うかかわりを含めて意味する（58.4%）であった。LSW の理解による「子どもの生い立ちへのかかわり」実施度の違いをみると、日常のかかわりを含めて意味する、セッション型を意味する、よく分からないの順に実施度が高いという結果が示された。

5. 考察

子どもの生い立ちへのかかわりでは生活場面でのかかわりが多く、実施度も高いことから、生活場面型 LSW が施設において広く実施されていることが明らかとなった。生活場面の中で子どもと出来事や生い立ちを共有し、子どもの話を傾聴し、受け止めるかかわりを行い、具体的に子どもの疑問に答える（説明する）際は、改めて場を設ける（設定型）という繋がりがみられた。LSW の理解については、「LSW についてよく分からない」施設は、生い立ちへのかかわりの実施度が低かった。日常的に子どもの生い立ちを意識したかかわりをしていないことが LSW への関心や理解の乏しさに影響していることが推察される。また、「セッション型 LSW を LSW と捉える」施設も生い立ちへのかかわり度合いが低い結果となった。「LSW=セッション型」という理解が、LSW や子どもの生い立ちにかかわることへのハードルを上げ、実践に踏み切れていないことが考えられる。今後 LSW を推進していくためには、生活場面におけるかかわりを含めた LSW の捉え方をより広げていくことが重要だといえる。

本研究は JSPS 科研費（課題番号：19K14000）の助成を受けて行なったものである。本研究にご協力いただいた全国の児童養護施設の方々に深謝いたします。